

うたう

—— 小歌の声、俳諧連歌の場

鈴木 元

連歌師宗長と小歌

時は大永四年(一五二四)の四月のこと。その生涯の多くを旅に過ごした連歌師宗長は、尾張国の知人の誘いに応じ、またも都を離れ東への旅にたとうとしていた。

一休遷化の地、薪酬恩庵に寄り出立報国の焼香を済ませ、次いで伏見の津田備前入道を訪ね、伏見から宇治橋へと舟で向かう。途中、小椋池にさしかかった辺りであらう。宗長は自身の手記の中に次のように記している。

美豆の御牧、八幡山、木津河ながれ逢て、水ひろく湖水のごとし。京よりいざなはれくる人々、船ばたをたたきて尺八、笛ふきならし、宇治の川瀬の水車何とうき世をめぐる、など此比はやる小歌、興に乗じ侍り。岸の卯花汀の杜若咲あひておもしろかりし也。

(島津忠夫校注『宗長日記』岩波文庫)

京から下ってきた遊興の舟であらう、舟中の人々は船端を叩き尺八、笛を吹き鳴らしながら当時流行の「小歌」をうたっている。戦国の世のもう一つの顔を活写して余すところがない。宗長の寸描に掬い取られた小歌は、これより六年前に成った『閑吟集』に、

宇治の川瀬の水車 なにと憂き世をめぐるらふ

(新日本古典文学大系、岩波書店)

と見えており、いかにも当代の空気を伝えている。

当時流行の小歌が楽器をともない、身振りもよろしく享受されているさまを、連歌師が生き生きと筆録した、ただそれだけのこと。この一面面だけを切り離して見れば、そういうことになる。だが、中世歌謡の研究史のなかでは広く知られたことながら、小歌だけに限らず「田楽のうたひ」等、同時代の流行りの歌謡を、宗長はたびたび話題にし筆にとどめており(たとえば『津山記』永正十四年条)、巷間に流布した俗謡に寄せる彼の関心のほどを窺わせる。

だがそれだけではない、宗長の連歌作品が当代の歌謡と表現や構想の点で密接なかかわりがあるとされる事例も、小野恭靖氏により指摘されている(『中世歌謡の文学的研究』笠間書院、一九九六年)。同じく『宗長手記』

の大永三年の年末記事、この時も薪の酬恩庵である。「炉辺六・七人集まりて、田楽の塩噌のついで」の俳諧として数々の句が記しとどめられている中に、次の付合がある。

なんぼうこされた花にたはぶれ
おちやの水梅が枝こそに汲みよせて

閑連の指摘される小歌を、まずは『閑吟集』から引こう。

御茶の水が遅くなり候 まづ放さいなふ 又来ふかと
問はれたよなふ なんぼこじれたい 新発意心ぢや

『宗長手記』とは微妙な違いがあるが、小野氏の指摘のとおり「こされた」は「こざれた」と解するのが正解で、「なんぼうこ戯れた」から「お茶の水」が連想されての付けであり、その背景に右の小歌の流行があったと見てよからう。『日葡辞書』に「[are, ru, eta.] (ジャレ、ルル、レタ) の見出しのもと、これを「Zare, ruru」(ザレ、ルル) の崩れた形であるとの旨の注記がなされており、これに接頭辞「こ」が付いて「こざれた」となったものであろう。弘治二年本節用集に「左礼^{ザレ}義^義戯」と

あるのがそれに当たる。

一方の閑吟集小歌は「こじれたい」とやや表現が違う。新大系等「じれつたい」の意ととつており、前後の脈絡もこれで通りやすいのだが、「じれる」「じれ(つ)たい」の用例が同時代に見当たらず、やや不審を残す。「こじれる」の形でも同じである。閑吟集の表現はひとまず措き、宗長手記の句形に沿って考えるならば、ここも、小野氏が狂言「お茶の水」の諸本を引いて検討したように、狂言に取り入れられた小歌が参考となる。大塚光信編『^戯能狂言集 翻刻・注解』(清文堂)により、まずは曲の概要をおさえておこう。

ある寺の住持が、翌朝の来客のため茶に用いる水を用意しようとする。そこで新発意(僧侶になりたての小僧)に命じ、野中の清水へ水を汲みに行かせようとするのだが、新発意はそれは門前の女の仕事だと難色を示す。結局、門前の女が水を汲みに行くこととなる。女は仕事を迷惑がりつつも、「ここは人遠ひ所じやほどもに、小歌をうたふてくまふ」と、小歌をうたいながら水を汲み始める。そこへ新発意が加わり、時に交互に、また共にうたい水を汲む。最後に新発意・女が声をあわせ、へおちやの水が、おそくなり候、退かひ放さひ、帯切らさひな、また来うかと問はれたよの、なん

ば、こじやれたおしんぼちな

そこへ住持が登場、新発意を追い入れにする。

幕切れの演出はいくつかのパターンがあるようだが、以下の検討に影響はない。幕切れ間近に新発意と女とが和して歌うのが、問題の「お茶の水」の小歌であることを確認しつつ、この小歌が何をうたっているのかを知るために、加えて『狂言六義』（北川忠彦他校注『天理本狂言六義』三弥井書店）所収の「水汲新発意」を見ておこう（和泉流では「お茶の水」の題を用いない）。幕切れ近くのアド即ち女の台詞から引く。

アドへいつまで汲べきぞ、あじきなやと云て、女立て、水桶を戴く、其時又走り寄つて、袂に取り付いて、又いつおじやらうぞと云 アドへ一期参るまひと云 シテへあら名残惜しやと云て、腰に抱き付く、お茶の水が遅く成候をうたひ出す、お新発意やのと云て、水桶を傾けて新発意の頭に掛けて女は入る

「いつまで汲み続ければいいのか」と疲れ切った様子の女に走り寄り、新発意はその袂に取り付いて、「今度はいつ来る」と問うと女は「二度と来ない」という、それを聞いたシテ（即ち新発意）は女の腰に抱き付く。

そこで、例の小歌となるという展開。

天理本の狂言六義には、謡い物や和歌などを別に記した「抜書」が付されており、それによれば女がここのうたう小歌は、「お茶の水が遅く成候 まづ放さしめまづ放せ 又来うかと問われたよの なんぼうこじやれたお新発意やなふ」となる。つまり、戯れすり寄ろうとする新発意を、「お水の持ち帰りが遅くなるじゃないの、悪戯なお新発意ね」と、あしらう様と小歌が重ね合わせられているのである。虎明本でも、小歌の使いは基本的には共通しているよう。

「お茶の水」の小歌が纏うこうした演劇性からは、この歌がまずは狂言歌謡として作られたものではないかという疑問も生じよう。また実際、その先後関係について議論を呼んだこともあるのだが、今では独立の小歌としての流布の方が早いという見解に落ち着いているようである。だが、小歌が先か狂言が先かという議論よりは、水汲みの水辺を背景とする歌謡の場があったのではないか、という橋本朝生〈御茶の水〉と〈水汲新発意〉の提起（『狂言の形成と展開』みづき書房、一九九六年）のあることを、狂言研究の到達点として紹介しておきたい。

なお参考までに付け加えれば、「お茶の水」の歌は、三条西実隆作の絵詞草案にも記されており、そこでも

水汲みの藝能の余響を残して描かれていることを、徳田和夫「物語絵巻の創作―画中詞・語り物・狂言と歌謡」が指摘している（『お伽草子 研究』三弥井書店、一九八八年）。このような市井の歌声すらも、規範性の軀を解かれた俳諧連歌の場になると、付句の中に及んでくる。それが室町という時代であった。

さて、狂言の小歌を経由して再び宗長手記の俳諧に戻れば、水汲み女とそれに戯れかかる男のイメージを鮮明に宿した歌謡の文句から、「なんぼうござれた」の一句はすぐに「お茶の水」の語を呼び起こし、馴れ合う男女の面影を重ねつつ梅の花に戯れかかる男を描く付合が成り立つたと推測される。ところが、付句の「枝こそに」は解しがたく、あるいは「枝ごと」の誤りであろうか。その修正でよければ、梅が枝ごとに汲んだ水を注ぎつつ、戯れかかる男を描いたとみることができる。梅花にはやはり女の残影がある。こちらでは水汲みするのは男となるだろう。

隆達節

広い意味で小歌に属するとしてよい戦国の世の流行歌謡に、隆達節なるものがあつた。堺の町衆であつた高三隆達が節付けをし、文禄慶長期の上方を中心に広く口ずさまれた歌謡である。俳諧連歌とこうした流行歌謡

との親和性を窺わせる事例を、これも小野氏の著書『戦国時代の流行歌』（中央公論新社、二〇一二年）から拾ってみることにする。

切りたけれどもいや切られぬは、月隠す花の枝、
恋の路

切りたいとは思つても、思い通りに行かぬもの、それは月を遮る桜花の枝に、恋の路。その節回しはもはや知られぬところながら、かような小歌が口ずさまれていたとは、なるほどいかにも室町の世は洒落ている。さて小野氏によれば、これは次の俳諧連歌を取り込んだものという。

切りたくもあり切りたくもなし
ぬす人をとらへてみればわが子なり
さやかなる月を隠せる花の枝
こころよき矢のすこし長きをば

（鈴木棠三校注『犬つくば集』角川文庫）

俳諧の世界ではよく行われた前句付けの遊びである。切りたくもあるけれど、切りたくもないものは何、という謎かけの前句に対し、一句目は盗人を捕まえてみ

れば我が子であった、と付けたもの。二句目が先の小歌とかかわる句。表現および発想の近さは自ずと知られよう。三句目は、具合のよい矢なのだが少しばかり長過ぎるのが難、と解いてみせた作。

校注にあたった鈴木氏の「付注」に記されるように、『犬つくば集』所収の句は戦国から江戸初期にかけ相應に流布を見たようで、たとえば、貞徳の『新增犬筑波集』には、これらの句に対する次のような批評が見られる。

切たくもあり切たくもなし

盗人をとらへてみれば我が子也

隣のやぶの竹はおられず

笋ぬす人をとらへたれば隣のをばとらず我が筍をとるなり。

切たくもあり切りたくもなし

さやかなる月をかくせる花の枝

此句無レ誹言。

おきてはためく春の村鳥

花にねたる村鳥の羽にて月をかくすとなり

切たくも――

心よき矢のすこしながきをば

是は狂歌の上句のやうにてとまらず。いかに此集にあればとて、今は不可用。(下略)

(古典俳文学大系『貞門俳諧集一』集英社)

下巻にあたる別称「淀川」という巻からで、『犬つくば集』の一句目については、特段のコメントはなく、自作の句を「盗人を」の句に付けてみせる。隣の藪の筍は盗られていないのに(我が家の筍ばかりが被害に遭つて不審だが)、「盗人を捕らえてみれば」と前句につながる趣向である。

二句目「さやかなる」の句については、「誹言」(一般には「俳言」)が見当たらないとの評が寄せられている。即ち、すべて歌ことばになっていて、これでは俳諧ではなく純粹な連歌になってしまっているという批判である。この句に付けるに、貞徳は、月を隠すのは花の枝ではなく「花に寝たる村鳥の羽」と応じた。寝起きの鳥が一斉に羽ばたき、有明の月が隠れる様としたのである。

引用に際し「はためく」として掲げたが、当時、「はためく」「ばためく」両方の語形が存在した。「はためく」は、『日葡辞書』が「Auate」(慌て(はためく)) (Fatamegi. u. eita.) の連語を掲げることから窺われるように、今日の「慌てふためく」の「ふためく」にあたる。同『辞書』が、「Fatamegimauaru. (はためき回る)」なる連語を立項していることも参考になる。一方、「鳥が飛ぶ時、または翼で地面を打つ時、音が出る」(邦訳)

ことを「ばためく」(Batameki, u, eita.)と言った。鳥の羽音の形容として「Batabata. (はたばた)」の語を立てていることから判るように、擬音語から派生した動詞であろう。鳥が慌て騒ぐ様を視るか、羽音を聴き取るかの解釈の違いで、いずれともそれそうである。

最後の句に対しては、「長きをば」という句末の据わりが悪く、一句としての独立性の弱い点を批判したものの。「今は不可用」とは、今どきはかような句は容認しないことを述べている。

さて、本筋から外れ過ぎたかもしれないが、謎かけの前句付けの方が先で、隆達節はこれをもとに小歌に仕立て直したものと見るのが妥当であることを、念を入れて確認しておきたかったのである。さらに念を入れて補うと、江戸初期刊の『新撰狂歌集』には、これとまた少し異なつた形ではあるが、前句付けとして伝承された例を見ることができ。

有寺へ、だんなより大なるありのみ一つをくりければ、これに付て一句すべし、よくつきたる人に此なしを参らせんとて、坊主、

きりたくも有きりたくもなし

大ちこ

すずり箱のかけごにあまる筆のぢく

こちこ

月かくす花のこずゑを見るたびに

いづれも心をつくし給へば、しんばち罷出、

それがしも一句付申さんとして、

なし一つおしむ坊主のほそくびを

といひければ、ばうずはらをたててかのなしをうちつけければ、やがてとりてにげける。

(『狂歌大観』明治書院)

坊主、大稚児、小稚児、新発意の駆け引き、応酬という形式や、坊主をやり込めた機転の利いたオチなど、典型的な初期笑話の話をなしている。もはや蛇足の補注は不要であろう。俳諧や咄の世界では、より俗語への傾斜や滑稽性を強める方向で展開していくが、「切りたけれども」「切られぬ」ものとして「月隠す花の枝」が案出される契機は、やはり前句付けの遊びの場にあつたであろう。小歌と連歌とは、相互に往還する関係として影響を与えあつた。

聯句

仮名草子『百物語』の一話(巻上・第四十話)として、次のような話が伝わる。

策彦と紹巴との百韻の漢和を見侍りしに、おもしろき句どもおほき中に、

難^{がたし}レ 奈^{いかにとし} 読^{よみの}残^{こず} 書^{しよ} という句に、

秋風に飛行蛩吹きえて、と脇にし給ひける。

又の懷紙の中に策彦、

沙^{いさご} 湿^{うるほふて} 履^{くつに} 無^{なし} 声^{こゑ} といへる句に、

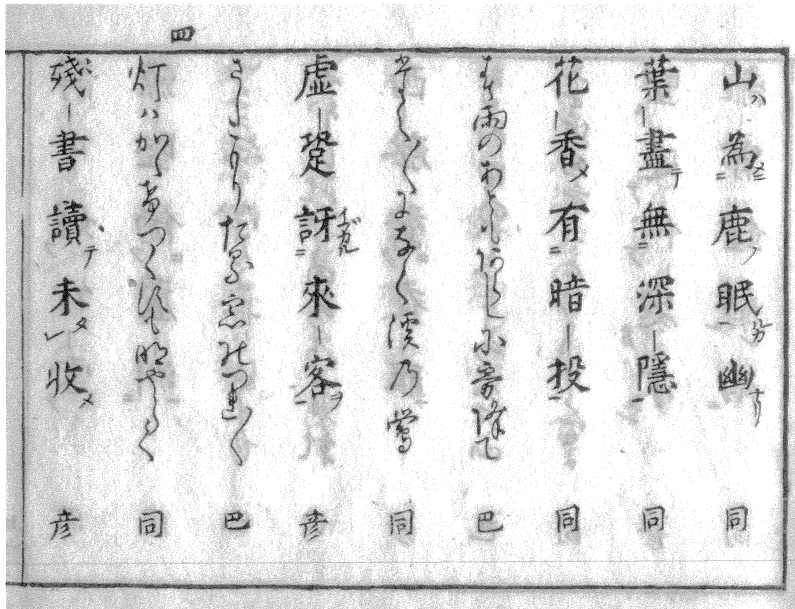
しのぶ夜の雨は中々たよりにて、としられける。
おもしろき句どもなりと聞し。

(近世文学資料類從『百物語私可多咄』勉誠社)

ここでは漢和の聯句の話題が記されている。策彦、紹巴ともに戦国期の実在人物で、五山僧と連歌師という組み合わせである。両者は実際に和漢や漢和の聯句で顔を合わせることもあり、史実と無縁の設定というわけでもない。なにしろこの時期の話には、虚実定め難いところがあるのだけれども、前の一聯については、永禄十一年(一五六八)に作られたとされる、次のような類想句の存在が前田金五郎氏により報告されている(近世初期笑話の「源流」『国語と国文学』50巻2号、一九七三年)。

灯火はかかげつくすも明やらで 同(紹巴)
残^メ書^テ読^メ未^レ収^メ 彦(策彦)

前田氏も認めているように、これに依ったとも思えないのだが、当時の聯句はかなり発想が類型化しているところもあり、読みきれなかった書物に対し、秋風に吹き消された螢火と応じた句を、紹巴が実際に詠んだ可能性も低くはない。



版本『石鼎集』(左端の二句が当該句)

さて問題は後者の一聯である。前田氏は相国寺僧の記した『蔭涼軒日録』寛正三年九月十七日の記事に、「窓の雨」云々という発句に対して付けた勝定国師の入韻句として「沙湿履無声」の句が見えており、「尤も絶妙」（原漢文）と評されていることを指摘し、策彦の句とするのは誤りとされた。

ところが、その後、深沢眞二「和漢聯句の俳諧的側面——『百物語』所引句をめぐって——」は再びこの句を取り上げ、国会図書館蔵『連歌合集』所収の大神宮御法楽の和漢千句の第三にも、次のように同じ漢句が見られることを指摘したのである（『和漢』の世界和漢聯句の基礎的研究）清文堂出版、二〇一〇年）。

朝豈叨微禄

（御製）

沙湿履無声

入宮（入道宮）

前句は「朝は豈に叨^{みだり}に微禄ならんや」と読み、これに和漢朗詠集の一句「朝候日高けて冠の額拔けたり、夜行沙厚くして履の声忙がはし」（巻下「禁中」）を念頭に「沙湿」の句を付けたものと、深沢氏は解された。ただし、前句は「朝」に宮仕えの意を含ませる点で共通するのみで、句意に朗詠の句はあまり関与しないようだ。

ちなみに入道宮の句に付けた次の句も漢句であり、

『百物語』との一致は、「沙湿」の漢句一句のみである。大神宮の御法楽の千句は、天文二十四年（一五五五）の催しとされており、紹巴の活躍時期でもある。さて、これをどう解するべきか。

深沢氏はいくつかの傍証を挙げながら、連歌にせよ聯句にせよ、評判となった好句は先行例の存在を承知で、繰り返し模倣や反復利用がなされていたのではないかと説かれた。つまり、策彦が「沙湿」の句を詠んだというのも、あながち誤りとも断じがたいのではないか、というのである。連歌咄の類いは、とかく有名人に仮託されがちであり、信憑性をあまり律儀に詮索するのも野暮というものだが、名句の再利用という事態はまことに興味深い。勝定国師が真の作者であつたかどうかも厳密には定かでなく、『蔭涼軒日録』の記事も、ある意味で連歌咄の萌芽ともみなしうる。『百物語』の一話は、その変奏とみてよいかもしれない。

しかし、深沢論のもっとも肝心な点は、評判の漢句が繰り返し人の口にのぼった背景には、これも小歌の存在があると指摘している点である。『中世歌謡資料集』（汲古書院）所収の国文学研究資料館本『宗安小歌集』により掲げる。

雨はさながらたよりありいさごうるほふて沓にこ
糸なしく

深沢氏は百物語の句と小歌の表現との密接な関係を目指し、表現の微妙な差を吟味しながらも、いずれが先に成ったかについては慎重に判断を保留された。これまでに述べてきたように、両者の影響関係は双方向的であり、いずれが先行してもおかしくはないのだが、私はこの場合には聯句が先だろうと考えている。

江戸の初期俳諧へ

おおよそ室町後期から戦国時代の俳諧連歌および聯句について、小歌との交渉を見てきた。『宗安小歌集』にふれたついでに、この小歌集の編者宗安について補っておこう。宗安に関する従来の研究を整理しながら落合博志氏は、天正～文禄期の活動の知られる連歌作者「宗安」を有力な候補者として指摘された（『中世歌謡資料集』解題、二〇〇五年）。これまで述べた趣旨からするならば、さもありませんと思うが、いましばらく研究の行方を見守りたい。

さて江戸時代に入り、貞門俳諧の時代になると、小歌の浸透はもう一段階進んだ状況となる。松江重頼の『佐夜中山集』（寛文四年（一六六四）跋）になると、小歌は「本歌取り」の一体に組み込まれるに至り、巻三には小歌

取りの句例が列挙される。句の引例は省くが、重頼の考えでは、

諷舞世話や平家や太平記

皆はいかいのよき友ぞかし

「俳学之大概」の梅千世百首のうちの一首（『佐夜中山集』巻五）に表明するように、謡い、舞曲、慣用句や諺から、平家物語、太平記におよぶ、耳に馴染んだものすべてが俳諧の種となり友となる、というのである。となれば、小歌が例外となるはずもない。

いわゆる小歌だけでなく、当代の様々な流行歌謡も俳諧と交渉するようになる。竹竿の先に鳥もちをつけ、小鳥を捕らえる真似をする滑稽藝「鳥さし」に伴う囃しの歌謡を例に、その文句取りが初期俳諧に浸透していたさまを、母利司朗「〈見さい〉の歌謡と俳諧」（『俳諧史の曙』清文堂出版、二〇〇七年）は、俳諧史の一齣として描き出した。しかし、こうした流行の歌謡と俳諧との交渉も、俳壇の流行の推移とともにいつしか過去のものとなっていくたのである。